

6年1組

木や木から生まれる炭の探究 ～働きかけていくことで見えてくる様々な魅力～



新たに見えてきた 炭の魅力

総合の時間、わたしは子どもたちに、3kg453円、1kg550、500g3180円の「値段の違う3種類の炭」を提示しました。すぐさま算数の知識を使い、1kg あたりで比較する子どもたち。すると 1kg あたり 151 円、550 円、7360 円とさらにその値段の違いが明らかになり、子どもたちはどの炭が一番高いか考え始めていきました。実際に炭に触れたり、匂いを嗅いだりしながら、「同じ黒でも全然違う」「叩くと音が全然違う。楽器みたい」「こっちは重さがギュッと詰まっている感じ。密度が違う」と五感で炭と向き合っていく子どもたちがいました。正解を発表すると「やっぱりー」と納得する子どもたち。一番安い炭は一般的なバーベキューで使う炭、次に高いのが「白炭」と言われる、少し白みがあった炭。そして一番高額なのは、宮崎県産ウバメガシでつくった浄水用の備長炭です。炭にもいろいろと種類があることを知った子どもたちは、早速炭について調べ始めていきました。炭づくりの動画を発見したAさんは、「自分の炭作ってみてー」と叫んでいました。何か炭で焼いて食べてみたい」とつぶやくBさん。炭はインテリアとしても使えることを調べていたCさん。「炭を追究すれば、さらに木の魅力も広がりそう」と語るDさん。「総合では、木はもう十分だから新しいことをやりたい」と日記に綴っていたEさんは、「もっともっと木のことをやりたくなってきた」と次の日の日記に綴っていました。子どもたちの中で炭が1つの追究したい対象として位置づいていったことを感じました。



そこで、「炭火で焼くと食べものは美味しくなるのか」を追究するべく、校庭にかまどをつくり、炭火でウインナーや野菜を焼いて味見をしてみました。「炭火焼だけでなく、比べてみたほうがいい」というFさんの発案で、ホットプレートも用意し、食べ比べができるようにしました。飯盒炊爨の経験や、理科の「ものの燃え方」の知識を得ている子どもたちは、早速炭に火をつけようとします。しかし、薪と違い、火が付いたかどうか分かりづらい炭に戸惑う子どもたち。Gさんは、「こんなんではついてるの?」とわたしに聞いてきます。そこで「軍手を取って手をかざしてみて」というと「熱い!」と驚き、「俺が知ってる火はもっとぼーっとする感じだから」と、炎を上げずに熱を出す炭の性質に、「燃える」というイメージが更新されているようでした。食材が焼けると、その見た目、匂い、味をじっくり感じながら食べる子どもたち。ホットプレートと比べると、「全然違う。パリッと感が違うし、香ばしい」「ホットプレートは脂っぽいくけど、炭火はいい感じに焼けてる」「ピーマンがこんなにおいしいとは思わなかった」「忘れられないソーセージの味になった」など次々に感想を言い合っていました。

炭火焼きだと食べものに違いが出ることを実感していました。活動後は「自分たちでも炭を作りたい」「炭の魅力を追究することで、さらに木の魅力も追究していける」と挑戦したいことが見えてきた子どもたち。炭や木をはじめとする、わたしたちの身の回りにあるものも、追究してみるとその価値や今まで気づかなかった魅力を発見できます。こうした当たり前に感じているものを、改めて追究し、その価値が子どもたちの経験に位置づいたとき、くらしを豊かにするのは、他律的ではなく自律的な営みにあり、自分の在り方が大切であることに気づいていくのではないかと思います。



もっと身近に木を感じられました

「今年も交流しませんか」というわたしの頼みに、「ぜひ」と二つ返事で答えていただいたキノハナ kinano の坂本さん。先週行った「キノハナづくり」は6年1組の子どもたちにとって、3年目の交流となり、キノハナ kinano のみなさんも3年連続で交流する学級は初めてのことだということでした。

1回目がカーネーション、2回目がヒマワリ、そして今回はバラづくりに挑戦です。このバラですが、今までワークショップで教えたことがなく、本来は企業秘密だそうですが、3年目の子どもたちだからこそということで、教えていただきました。

まずは、動画で作り方の確認です。およそ5、6分の動画では、バラ1本をつくりあげる様子が映し出されました。流れるようにバラをつくっていくプロの方の手さばきを見ると、一見簡単そうに見えます。しかし、実際に作業が始まると、子どもたちはおよそ1時間で1～2個をつくりあげるのがやっとでした。



特に難しかったのが、花びらを付けていく作業です。作業を開始すると、「カーネーションになっちゃった」「別の花になってしまう」とつぶやきが聞こえてきました。それでも、Kinano の皆さんのお手本のバラをじっと見ながらバラに見えるように花びらを付けていく子どもたち。「木には曲がりたい方向があるんだよ」というアドバイスを基に、1枚1枚ていねいに花びらを付けていきます。

1本目が思うようにいかなかった人も、2本目はコツつかみ、かなりバラの形に近づいている子たちが多くなってきました。Hさんは、作業しながらかんなくずの匂いを感じ、「北相木村の木を感じる。木をより身近に感じられた」と、久々に木の素材に触れ、昨年追究した木に思いを寄せているようでした。またIさんは、「今炭を追究しているから、今度挑戦する『花炭』と組み合わせたい」と、今年度の活動を見据えての構想を考えていました。Jさんは、今まで交流して作成したキノハナは全て自宅に飾ってあるそうで、Jさんにとってこのキノハナは、今までの学びの証となっているようでした。

Kさんはこの日の日記に、次のように綴っていました。

坂本さんたちの思い

ぼくは、キノハナをつくっていくうちに、坂本さんたちの思いを、「キノハナ」を通じて感じました。それはなにかというと、キノハナを通じて木のことを知ってもらい、「もっといろんな人に広めてほしい」です。なぜかという、企業秘密のばらのつくり方も教えてくれたし、教え方も丁寧で、工夫や大事なポイントなどすべての教え方が丁寧だったからです。キノハナを通じて、坂本さんの思いを感じました。

ただの工作ではなく、キノハナ、そしてキノハナ kinano みなさんとの交流があったからこそ、Kさんは、ものの背景にある作成者の思いや願いが見えるようになってきているのだと思います。身の回りの何気なく見ているものにも、様々な人の思いがこめられていることが多いです。そんな人の思いを感じ、自分でできることを考えていく子どもたちになっているのだと感じます。

どんなものでも炭になる？花炭づくりに挑戦

「炭づくりに挑戦したい」と願う子どもたちと取り組んだのが「花炭」づくりです。

「炭」と聞くと、一般的には木が炭化したものというイメージがありますが、花炭は、花、葉っぱ、木の実、野菜や果物など、植物の形をそのままに、真っ黒に炭化させて作る炭のことです。「飾り炭」とも呼ばれ、500年も前から「茶の湯」の世界では大切にされてきた技術だそうです。

理科で、「空気がないところで物を燃やすとどうなるのか」という問いを実験し、炭になることを知った子どもたちは、さらに色々なものを炭にしようと原料となるものを探し始めました。

Lさんは、附属特別支援学校の庭に落ちている松ぼっくりに目を付け、許可を取って拾いに行った時には、「できるだけ形が良くて、からからなものを選ぼう」と1つ1つの松ぼっくりの大きさや手触り、湿気を見定めながら選んでいました。Mさんは、「キノハナを入れて炭になるか確かめたい」と教室の片隅においてあるカンナグズからキノハナを作り出していました。昨年度樹木プレートを付けた木の葉、自然体験園に落ちている枝や実、折り紙で折った手裏剣や鶴など、子どもたちは思い思いに選んだ材料を、空気に触れさせないようにするために用意した鉄製の缶の中に入れていきました。

いよいよ炭づくり当日。かまどをつくり、いざ炭づくり開始です。火にかけてしばらくすると、缶の蓋に空けておいた穴から白い煙が上がってきます。まるで蒸気機関車のような煙の量に驚く子どもたち（匂いもなかなかのものです）。しばらく煙を見つめます。すると、その煙に火が引火する班も出てきました。そんな煙の色もだんだんと薄くなっていき、最後は煙が出なくなります。冷めてから蓋を開けてみると…なんと入れたものは、そのままの形で真っ黒になっていました。

しかし、強度が弱く、中には取り出した瞬間に崩れてしまうものもありました。それでも、見たことのない炭の数々に「すごい、カッコいい。ただの黒じゃなくてなんか輝いている」「本当に炭になった。もっともっと違うものも試してみたい」と歓喜の声をあげる子どもたち。

教室での振り返りでは、「缶の大きさが小さいものは早く炭になった。やっぱり大きさも関係してる」「薄いもの柔らかいものは炭になっても形が残りにくいから、花炭には向かない」「もう1回花炭に挑戦したい。今度はしっかり形が残るようなものにしたい」と体験したことから様々な気づきを得ていることがうかがえました。

子どもたちからは「この花炭を飾りたい」という声も上がりました。実はこの炭、防臭効果や除湿効果もあります。インテリアだけでなく、くらしをより豊かにする炭。また1つ炭の魅力を学ぶことができました。「花炭にリベンジしたい」と意気込むNさん。「バーベキューできるくらい大きな硬い炭をつくりたい」と新たな活動の展開を考えているOさん。「炭の浄水効果を調べたい」と科学の目で炭を見つめているPさん。次も子どもたちとどんな魅力と出合えるか楽しみです。

